

前号和歌短評 : 批評

著者	蘆洲月下漁郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	63
ページ	53-56
発行年	1898-02-17
その他の言語のタイトル	前号和歌短評 : 批評
URL	http://hdl.handle.net/2298/5059

勇むる云云はいさむ袖こそをしけれその云云などいひてはありなり
千早ふる神の恵のあるゆゑに仰くに高き名こそきこゆる

千早ふる神のめぐみのありてこそ仰ぐも高き名はきこえけれといふべきに
や

批 評

前號和歌短評

蘆洲月下漁郎

枯木蕭條寒風に嘯き、天地落葉萬物も蟄するの候、我か龍南歌壇は、燦爛たる花咲き亂れて、時ならぬ
美觀を呈しぬ。硯友會兼題を始めとし、即題、雜歌合せて七十有四首、亦盛なりとはいふべし。如此き
繁昌は未だ曾て見ざる所、今や文苑欄隆盛の極ともいふべきか、然れども數量の多少は、以て眞に文
學の盛衰を下するに足るや、いでや漁郎をして少まゝ駄評を加へしめよ。

時雨するの歌、雁の羽風を時雨とさくは、漁郎の未だ曾て聞かざる所、基紀君の新想乎、めづらし。弓
はりの、歌、月影くらき雲間といひては、月前の題意にそはず、物思ふの歌、難なし。雲はれての歌面
白し、しばしくまどるの一句趣あり。山人君の歌、情味津々、萬感胸に逼りて、思を月に寄するの夕、雁
聲を聞く、誰かあはれの感懷なからんや。まどあけての歌、竿のかりかねどは受けがたし。芝峰君の詩
名は夙に之を聞く、和歌も達者に詠まるゝとは、亦やさしき人かな、たかためにの歌、奇想とはいふべ
からざれども、月の桂の花の都にとは、めでたき詞遣ひといふべし。

こゝろしての歌、格調くだけたり。霜かれの、歌、たぐ霜をの歌、共に難なし。清泉君のたぐ霜にの歌、

滿目蕭條草葉悉く枯るゝの間、霜にたゞれる一本の菊、覺にゆかしからずや、されど残れる菊の心ゆかしもの下の句は、少し力輕さの感あり、いかにや。一松君の歌、君子世の流潮にならはず、超然節を持するの慨あり、佳調々々。霜をへての歌、花の中なる花とはいはましとは、をかまぐもいはれたるものかな。

秋の田にの歌、田夫の繁忙見るが如し。されどしばし、この句は、耳だちてわろし。桃江君の歌、想めぐらし。山里はの歌、格調整ひ老練の効著るま、されど櫛の枯葉は田家のみにも限らざるべし。小田の歌、たゞ並べたまでなり、歌にあらす、小山田のも亦然り。人目さへの歌、賤家の眞情穿ち得て妙、荒庭草枯れ、寂として訪ふ人もなき賤家は、時雨ならでは音づるゝものもなかるべし、情ありげにふるの一句、千斤の力あり、されど田家の意なきは、題にふさはまからず、いかにや。奇熊君の歌は、寫實の上乗なるべま、然りと雖も、歌は説明するものあらず、宜しく之を詩化せざるべからず。

厚氷の歌よろし、霜風にの歌、意さこえず、基紀君の歌、千鳥、月、霜、芦を詠み入れられたる才は感すべま、聲調整はず惜むべし、凡そ歌はことわるものにあらず、しらぶるものなりとは、千古の金言、想固より大に練るべし、調登に大に注意せずして可ならんや、夕沙のゝ歌、たゞ歌なり、山人君のは、聲調は流暢なれど、調に注意するのあまりにや、平語に陥ること多し、想と調とは並行せずしては、眞正の佳什は得られざるべし。觀楓會席上連歌、とりく面白し。

全卽題、讀む文の歌、才氣見えて桂園翁の壘を摩せんとするの感あり、一葉はかりはゆるせ、山姫の二句、纖巧に過るの嫌はあれど、當歌壇得難さの絶調なるべし。紅葉をの歌、友情可掬とやいはん。秋山のゝ歌、たをるもをしくたをらぬもをしの下句、趣味斬新とはいふべからざれど、面白くも詠まれたり。夕日影の歌、春をうつしての句めづらし、されどあまり巧を弄せんとすれば、反て拙に陥るの恐あり、誠むべきことにこそ、いく度かの歌難なし。

はらふべきの歌、草菴紅葉の題にはふさはしからず、草菴秋夕としては如何。た、か、た、め、に、の、歌、あ、は、れ

ふかき。すむ月への歌、夕の白露變じて朝の霜となるとは、基紀君も亦能く物理學に精通せりといふべし。ゆふ月の歌は調高き、さらぬたにの歌は、意あまりありて語足らず、一心君それ素養を怠る勿れ芝峯君の玉あられの歌、懷古の情、紙表に溢る、されど田原坂の歌は受けがたま。桃江君の菊の歌、わくれても花の色香のおくれぬはとは、詞意共にすぐれたるものといふべし、されどいにしへの歌は纖巧の弊に陥れるもの、俳諧歌と殆んど一髪を容れざるものといふべし。播磨瀧の歌、見渡せば、老親の共に難なしとやいはん。たらちねの歌、霜氣天に滿ち、寒衾氷の如きの夕、轉た故郷を思ひて、老親のことに及べば、誰か其高恩に感ぜざるものあらんや、眞情胸底より迸り出しもの、其詞葉の如何は、之を問ふの違あらざるなり。冬ふかくの歌、木枯のさわかぬ夜半もの、二句面白し。さゝかにの歌、着想斬新とはせざれども、才氣溢れて紙上に踊るの感あり、糸一筋を命にてとは、千百中稀に見る所の秀句とやいはん、されど梢に落葉のこれりとは結句輕きには過ぎずや。山人君のまどひしての歌、爐邊閑話のさま寫し得たりとやいはん、埋火の歌、新想なし。ことしこそこの歌、詞遣面白し、流れゆく歌、誰か這般の感懷なからんや、歲晚に至りて、烏兔の匆匆たるに驚くは、山人君のみにも限らざるべし。

*** ** ** ** **

葦原の中つ國の言の葉として、三十一字詩、素鷲の里より傳はりしより、筵に三千有余載、もとより盛衰興廢幾多の變遷ありしと雖も、連綿として絶ゆることなく、近世に至りては、歌人の數は、年と共に増加すること、雨後の菌の如く、新聞雜誌、文苑とまて歌あらざるなく、又見る人の多きも、歌に如くものなかるべし。數量の上よりいは、和歌は決して他の詩形の後に落つるものにあらず、されど眞の詩としての歌は、曉天の星よりも少なきは何ぞや。

夫れ和歌は、心を種として萬の言葉となれるものなれば、眞情を吐露せざるべからざるは、漁郎の喋々を俟たざる所、然れども今の世の歌人の詠み出でし歌を觀れば、多くは是れ僞にあらずや。古今の美、或は眞似するものあらん、新古今の艶、或は擬するものあらん、されど彼等の歌は、花ありて實な

きを如何にせん。才は則ちあり、されど血なく、涙なく、狂熱の情なきを如何にせん。然らば則ち匹夫匹婦も尙ば之を感ずるものなからん、況んや鬼神を哭せしめ、天地を動かすに於ておや。萬葉集短歌四千百八十六首、悉く金玉の響にあらすと雖も、少女の天真なる言葉は、詩の妙境に入り、丈夫の豪壯なる詞花は、天地をも震動せしめんとするものあり、是れ萬葉集が、我が歌道の無上の寶典たる所以にあらずや。然りと雖も、和歌も、短形とはいへ、詩として立つ上は、美的の修飾なくして可なからんや、修飾已に必要なり、艶麗花の如く、皎潔月の如きの想、豈に不要ならんや、想の美具備すと雖も、格調の流暢を欠かば、亦以て詩といふを得ざるなり。今の和歌、想調兼備するもの幾何かある、纖巧の弊は、小刀細工に陥らざるか、豪壯の弊は、粗奔に陥らざるか、小刀細工、粗奔尙は可なり、只古人の糟粕を列ねて、得々然たるに至りては、誰か其鍍面皮を驚かざるものあらんや。

文學は、時代の反射鏡なり。奈良朝時代には、萬葉思想あり、平安朝時代には、古今思想あり、明治時代豈に明治の思想なからんや。世の歌人何を苦んでか、明治の新思想を歌はざる、徒に奈良朝時代の思想を繰返し、平安朝時代の詩語を臚列して、是にこれ安するは、抑も何の心ぞや。蓋し和歌は、一種の短詩形なり。宇宙の大、人生の繁、固より包容すること能はずと雖も、僅々三十一字を以て、寸鉄殺人の利あるは、萬國他に類を見ざる所にあらずや。乞ふ、如此きの短詩形は、是れ彈丸墨子國の小なるを白狀するものといふ勿れ、寸鉄と雖も、人を刺すの効、何ぞ必ずしも、大刃に劣るの理あらんや。

夫れ想は時代と共に變遷するは、識者を俟たざるも尙ほ之を知る。然るに世の歌人は、多くは是れ明治の歌人にあらず、世人が歌人を以て、社會に用なしと排する、亦恠むに足らざるなり。龍南歌壇の諸君、宜しく明治の新思想を謳歌して、和歌を以て、只消閑の具となすの蒙昧者流の惑を解けよ、妄評多罪。